

## 情報・データの視点から見た金融の将来像

フューチャー経済金融研究所長、デジタル通貨フォーラム座長  
山岡 浩 巳

金融の根幹は、マネーの高度な抽象化機能を活用した効率的な情報処理にある。マネーの創出により、人間は見ず知らずの他者と交換を行えるようになり、市場と経済社会を構築した。そして金融は、支出の異時点間の移動とこれに伴うリスクの再配分を可能とした。このように、マネーと金融の発明により、人間は最適な資源配分とリスクの分配とを、時間と空間の制約を超えて追求できるようになった。さらに、中世後期のイタリアに登場した銀行業は、支払決済と金融仲介の両機能を提供することで、預金口座から得られる決済情報を与信の信用リスク管理にも活用するなど、データの集積と活用を進め、情報処理を一段と効率化した。また、期間変換機能を通じてリスク分配の効率性も飛躍的に高めた。このような銀行業の優位性は、近代以降、殆どの国々で銀行が大きな力を持つに至ったことにも示されている。しかし、近年のデジタル技術革新とデータ量の爆発的増加は、銀行業の優位性を揺るがしつつある。預金口座の提供に代わり、検索やSNS、eコマースのプラットフォームの提供などを通じて大量のデータを集積し、金融を含む広範なビジネスに活用する産業や企業が登場している。これらの企業は、これまで銀行が優位にあった信用リスク管理などの面でも有力なチャレンジャーとなっている。また、クラウドサービスなどの発達に伴い、支払決済やリスクテイク、投資判断やリスク評価など、従来は束として提供されてきた金融サービスを分解（アンバンドリング）し、様々な非金融サービスと連携（リバンドリング）させる動きも活発化している。今後、デジタル技術の更なる発達に伴い、財やサービスを時間・空間を超え、分散型の構造のもとで直接交換する取引も拡大していくと予想される。もっとも、人間が避け難い不確実性が存在する以上、これへの対応として経済主体間での適切なリスク分担を追求する金融機能は必要とされ続けるだろう。さらに、脱炭素化などの新しい課題は、金融が従来のリスクとリターンの判断を超えた複雑な変数の評価とプライシング機能を発揮することを要請している。これに金融が応えていくことは、人間が新たな地球的課題を統制社会化に拠らずに市場メカニズムを通じて克服することにつながる。これからの金融を展望する上では、爆発的に増加するデータの集積と処理を誰が担っていくかが鍵となる。金融サービスの提供主体は、顧客の信頼の下にデータを預かり、顧客のためにその最善の活用をする主体としての性格を強めていく。金融は、様々な経済主体のニーズに応じて、多様な担い手が提供するサービスを繋ぎ合わせる「ネットワーク」としての性格を一段と強める。そして、その「ノード」となる主体が金融の主役を担っていくだろう。そして金融規制も、不特定多数からどの程度データを預かっているか、また、どの程度リスクを引き受けているかに、より注目するものとなっていくだろう。